

ART KISS LEITER

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE Contemporary Art Museum, Kumamoto

熊本市現代美術館発行 <http://www.camk.or.jp> [2008.初夏号] vol.37

日比野克彦「石垣プロジェクト」完成！

「日比野克彦 HIGO BY HIBINO」最終日の閉館4時間前に、とうとう段ボール石垣が完成！！

思えば2007年の暑い夏のある日、日比野さんが「ダンボールで石垣をつくるか…」という一言で始まったこのプロジェクト、商店街に段ボールをもらいにいくところからはじまり、作り方の検討、出張イベント、石工さんが集まらない…などの苦難を乗り越え、3558個の石による立派な武者返しが出来上がりました。この日はサックスとジャンベによる演奏やパフォーマンスも行われ、完成を祝う素敵な雰囲気ボランティアさんやお客さんと分かち合いながら、日比野展の幕を閉じることができました。(A.S)



Museum information

トーク&ワークショップin水俣「明後日朝顔の種をのせる船をつくろう！」 2008.2.17

快晴ワークショップ日和の水俣。熊本県環境センターの協力を得て、「HIGO BY HIBINO展」出張イベント「種をのせる船を作ろう！ワークショップin水俣」が実施されました。

まず、参加者には朝顔の種が渡され、「明後日朝顔(あさつてあさがお)」との出会いに始まりました。

スライドを見ながら日比野さんが全国的に展開する「明後日朝顔プロジェクト」や「HIGO BY HIBINO展」についてのトークを行い、その後、参加者とともに明後日朝顔の種をのせる「船づくり」のワークショップを行いました。

地元水俣の中学生や熊本、鹿児島などから30名以上ご参加いただき、様々な船を作りました。作成された船は、水俣湾の海原が見える窓辺に浮かび、夕暮れ時に起航しました。(M.H)



花ござ茶室でお茶会が行われました。 2008.2.10/3.16

日比野克彦展での重要なキーワード、「熊本の伝統工芸とのコラボレーション」の一つとして、熊本城の石垣をデザインした花ござで茶室が創られました。これは、熊本県農業研究センターい業研究所と熊本くすのき園の協力で完成したもので、その花ござ茶室で肥後古流小堀家のお茶会が催されました。室外のような雰囲気を持つこの空間で、旅草筒を使い、野点風のお茶会となりました。モダンな模様の花ござと伝統のある肥後古流との熊本ならではの茶席に、たくさんのお客様が途切れることなく参加され、初めてのお茶を体験する小さな子どもさんまで、とても和やかな楽しい会となりました。(N.I)



鈴木淳「水前寺公園で会いましょう」撮影 2008.2.23

水前寺公園での撮影は、まだまだ寒の残る2月下旬に行われました。被写体となる参加者8名と学芸員2名、それに「ピクニックあるいは回遊」展出品作家の鈴木淳さんと、遠足気分路面電車に乗り水前寺公園へ。現地でカメラマンの原田辰之さん(写真館原田)と落ち合います。

古い写真の女の子と似たような格好をして、同じ場所に立って、同じ構図で写真を撮る。顔や体の向きや、足の開き具合まで細かく合わせながらの撮影。途中で太陽に雲がかり、日差しを待つ場面もありましたが、撮影待ちの時間は皆で談話をしつつ、1時間はとて撮影は無事終了しました。

会場内には、自分自身が被写体になった写真が飾られています。中央にモノクロの古い写真。それをカラー写真がぐるりと囲んでいる。

間違い探しみたいな、ちょっとした変化はあるけれど、ほとんど同じ写真に見えてきて、私の頭の中ではモノクロがカラーになり、平成が昭和になり、今いるこの時間がなんだかとってもあやふやなものに思え、私は美術館の中で、時空を回遊したのです。(M.N)

*作品は「ピクニックあるいは回遊」展覧会場にて展示中です。



人形劇公演「アリとキリギリス」 2008.3.2

「日比野克彦展」関連イベントとして、人形劇ファンタジアによる「アリとキリギリス」が開催されました。カマキリやチョウなどの昆虫がたくさん出てきて子どもたちは大喜び、キリギリスへのアリのつつこみには大人のほうが大ウケでした。(E.Z)



インターナショナル・アドバイザー講演会 2008.3.9

当館のインターナショナル・アドバイザーのキム・ソンジョンさん(韓国国立芸術総合大学教授)をお迎えして、韓国の現代美術についてのお話いただきました。

ソウルのアート・ソングジュ・センターでキュレーターとして企画した数多くの現代美術の展覧会をご紹介下さいました。近年では大学で教鞭をとる傍ら、さまざまなスペースで、展覧会という形式にこだわらないアートのプロジェクトを展開されています。美術コレクターの自宅の環境を再現した展覧会など、ダイナミックで多岐にわたる活動を知ることができました。(Y.H)



GIII vol.52 gaju~ありがとうのあしあと展 (2008.1.16-3.2)

熊本だけでなく九州内で精力的に活動している造形作家、gajuの展覧会が開催されました。一見、粘土で作られているとは思えない質感のかえるやヒツジといった動物たち、新作であふれた会場は、gajuさんの人柄が感じられるあたたかい空間となりました。

創作粘土ワークショップ 2008.2.17

また、関連イベントとして、アーティストトークと創作粘土ワークショップが開催されました。会場内で作品にまつわるエピソードを語っていただいた後、場所をキッズファクトリーに移し、手鏡を粘土やボタンなどで装飾しました。(E.Z)



GIII vol.53 老人福祉法制定45周年記念 第13回熊本市シルバー文化作品展 (2008.3.8-3.23)

熊本市シルバー文化作品展が開催されました。熊本市老人クラブ連合会と熊本市シルバー人材センターの会員の作品、合わせて180点もの力作が展示されました。絵画作品の他に工芸、陶芸、書、写真、手描き友禅や刺繍、様々な素材で作られた小物などバラエティーにとんだ温かい作品が並びました。その中から、井手富通賞には「お城の見える街」を出品された島田重光さんが、最高齢者賞には「馴染み髪の人形」を出品された村田テイ子さんが選ばれました。また、故・松野類三さんを偲ぶ、遺品コーナーも設けられました。(N.1)



GIII vol.54 春の収蔵作品選—中島千波、千住博、森山淡草 (2008.3.26-4.6)

この展覧会では当館収蔵作品の中から中島千波、千住博、森山淡草の作品を紹介いたしました。生命輝く春の季節ということで、桜の開花時期に相応しい中島千波が熊本の南阿蘇村に実在する樹齢400年余りの老桜を描いた「一心行の桜」や、岩絵の具で描かれた滝の飛沫が美しい千住博の「ザ・フォールズ」、種田山頭火の句をしたためた森山淡草の「山頭火」と、自然の神秘を愛で敬う心を感じることでできる3点を選びました。10日余りという短い会期にも関わらず展覧会場には多くの方が訪れ、外で感じられる春の賑わいとはまた違う、美術館内の静かで華やかな春の風景にじっと見入っていました。(S.Y)



「恋路物語」映画上映会 2008.1.27

「日比野克彦展」関連イベントとして、水俣市・「恋路物語」を成功させる会共催による「恋路物語」上映会が開催されました。全編水俣市で撮影されたこの映画が熊本市内で上映されるのは初めてとあって、たくさんの方々に観ていただくことができました。(E.Z)

「北品川四谷線」上映会 2008.3.1

日比野さん制作・出演の幻のインターネット配信ドラマ「北品川四谷線」(2001年)の上映会を行いました。日比野さん自身はもちろん、芸大の学生さんや藤井フミヤさん、本木雅弘さん、坂本美雨さんらも飛び入り出演される豪華な内容。現在ほどブロードバンドが普及していない当時、毎日放送される映像配信のドラマは前編的、アナログとデジタルが共存する様子は、現在の日比野さんの制作スタイルにも通じる息吹が感じられる作品でした。(A.S)

CAMKレクチャーカレッジ:坂本顕子「ドキュメント HIGO BY HIBINO」 2008.4.5

日比野克彦展企画学芸員によるCAMKレクチャーカレッジを開催しました。

日比野さんが下見のために熊本へやってきた2006年10月から、ほぼ1年をかけた準備期間を、100枚を超えるカットで紹介しました。その間、のべ月1回のペースで熊本に来ていただき、市内をはじめ、杖立、天草、山鹿、八代、水俣など、県内各地を縦横に駆けめぐって準備に奔走した様子を改めて振り返りました。(A.S)

プレママツアー／ファミリーツアーを開催しました 2008.2.9/3.8

恒例のファミリーツアー(2.9) & プレママツアー(3.8)が行われました。

ファミリーツアーでは通常の会場案内終了後に、皆で石垣ワークショップ会場に行き、楽しく石垣づくり。お母さんたちの「そろそろ帰ろうよー」という声を原目に、黙々と石垣づくりに没頭する子どもたちの姿が印象的でした。(A.S)

「CAMKオリジナル春のタペストリー」お披露目式を行いました!

当館のボランティアチーム「CAMKEES」の布絵本ボランティアさんたちは、現在CAMKオリジナル四季のタペストリー(壁掛けの遊具)を制作しています。3月2日、ようやく春の足音が聞こえ始めたこの日、その第一弾となる「春のタペストリー」の完成を記念して、お披露目式を行いました。人形劇ファンタジアさんのお力をお借りして、たくさんの子供たちの前でお披露目にボランティアさんも緊張の面持ちでしたが、「遊んでみたい人ー?」の呼びかけに「はい!はいっ」と元気よく返事をくれた子供たちに一安心。これからの制作の活力になりました。今後このタペストリーは、館内フリースペースのキッズサロンに設置され、春、夏、秋、冬と姿を変えていきます。いつでも自由に遊べますので遊びに来てくださいね。(Y.S)



モクモク工房 2007.9.13/10.11/11.11/12.13/2008.1.10/2.14/3.13

毎月第2木曜日に開催中のモクモク工房。2007年9月から2008年3月までは初級コースを行いました。初心者の方を対象とした基礎をじっくり教える講座で、マグカップ、お茶碗、大皿、型鉢、花器の5種類を作りました。ひもづくりやタタラなど作品に合わせた技法をつかいて、思い思いの形に仕上げていきました。焼き上がりは予想と違った色になることもありましたが、できあがった作品を手にとり、嬉しそうに眺めていらしゃいました。

「オリジナルの作品が作れてよかった」「非常に楽しかった」「勉強になった」などの感想をいただきました。(A.T)



【スイット・クマモト】 Suotto KUMAMOTO

本年度のスイット・クマモトは、熊本の華人インタビューです。(インタビュー・構成:麗庭江美)

*いける=花を生かす、こと考え、ここでは「生ける」と表記します。

【龍生派編】

いつも穏やかに話される岡村先生にいけばなをやっていたよかった点をお聞きしたところ、お稽古場での交流が、いけばなはもちろんのこと、それ以外でも学ぶべきところが多くて楽しいところであろうかとのこと。「日本の伝統芸術というだけでなく、いけばなから感じる季節の移り変わりや年中行事など若い人たちにもっと大切にほしいです。学びに来てくれている人達には「自然に学びなさい」といつも伝えていますが、とおっしゃる先生のお好きなお花は「生けるのが難しいのですが、やぶつばきです」とのこと。いつも静かな中にも凛とした強さと優しさを感じる先生には、ピンクのグラジオラスがぴったりだと思ふ。



熊本の華人展vol.4作品生け込み風景

【最終回に寄せて】

2006年1月から始めた「熊本の華人インタビュー」も今回の龍生派で無事終了することができました。これもひとえに拙いインタビューに快くお付き合いいただいた21流派の先生方のご協力のおかげです。改めて御礼申し上げます。いけばなを通して先生方が体現されていること、後進に伝えたいことは、流派は違えどほぼ同じだったように思います。私自身先生方のお話に触れ、いけばなの奥深さのみならず、生きていく上での芯になるような、人と接する上での姿勢、継続することの強さを学びました。これからも、少しでもいけばなの素晴らしさ、強さを伝えていくお手伝いをさせていただければ幸いです。心からの感謝を込めて。

ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]
熊本県で「アート、どう？」の展です。

第17回砥用の春 工芸展

2008.4.4-4.7 緑川ダム湖畔 美里町屋内ゲートボール場

今年で17回目となる、熊本県内21人の工芸家が集った春の新作工芸品展。下益城郡美里町の緑川ダム湖畔にある会場は、正に春爛漫というような満開の桜に包まれていた。体育館ほどの広さがある会場内には、イ草、陶芸、革工芸、木工、鍛冶、染物、和紙などの工芸品が所狭しと並び、また、生け花やカフェ、特産品の販売も行われるなど、地域性を感じられる暖かな雰囲気も溢れていた。地元の人のみならず、熊本市内から足を伸ばした人や県外から訪れた人も多く、会場内ではみな一様に寛いだ表情で穏やかな春のひとときを過ごしていた。(S.Y)



草心流 いけばな展

2008.2.15-2.17 ギャラリーキムラ
熊本市水道町3-5(上通KビルBF) TEL327-0166

「早春をいける」と題して、草心流のいけばな展が開催。野に咲く草花を生けるのが特徴の草心流ならではの花々のみならず、竹を大胆に使った作品や花器をいかした作品がならんでいた。「風が通るようにいけなさい」という家元の言葉がそこかしこにちりばめられている作品からは、すぐそこに来ている春を十分感じることができた。(E.Z)



書団選抜臨書展

2008.3.18-3.23 熊本県立美術館分館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

全国書道団体連合会(鳥飼孝一会長)が、「書を学ぶ者は、中国および日本の歴代の書の名作をしっかり勉強すべきである」という主張のもと、緒方龍生さんがチーフで、毎年行っている展覧会である。「臨書」とは古典を見て書くことを言うのであるが、臨書のあり方は、極めて写実的なものから、古典に啓発された発想を強く打ち出す様式まで様々で自由である。要は、何のために古典を学ぶか、古典の何を学ぶか、各人の主張によるものである。「臨書」は「創作」ではないという理由で、評価をしたがらない人もある。しかし、学習は常に必要なことであるから、学習過程を見てもらうことがつまらないとも言えないだろうし、また、日中歴代の名作が、もともと多様な様式で多様な魅力を見せているので、臨書する人によって更に多様性が増幅されることになって、理屈や思想抜きで、結構観て楽しめるものである。この展覧会も数年前から、数名によって極めて意欲的な超大作が競われるようになって、観る者を楽しませてくれるようになった。今年も、三嶋天鴻さん、岩本竹田さん、緒方龍生さん等、意欲的な大作が観られて共鳴した。今回は、最終日の23日の15時から、会場に巨匠・故上田桑鳩の直筆臨書帖を数点ひろげて、森山淡草の「上田桑鳩の臨書指導の実際」についての講話が企画され、参加者は熱心に歴史的巨匠の臨書帖に見入っていた。(T.M)

第22回汲古会書作展

2008.3.18-3.23 熊本県立美術館本館
熊本市千葉城町2-18 TEL351-8411

日展会友の書家那須球石さんが主宰する汲古会員49人がかなや調和体書など85点を展示した。今年「春に遊ぶ」をテーマに一人2点ずつ出品し、古典の臨書に創作を加えて、軸やパネル、帖に卷子本(かんすほん)と作品は多彩であった。那須球石会長の牧水の歌の作品は流麗な線のリズムに変化があり、さすがである。更に、「家族への手紙コンクール秀作」の「秋刀魚の詩」の調和体書は、素朴な線でまとめてあり印象にのこる。永田静汀さんの太田水穂(おた・みずほ)の歌2首は潤渇のきいたちらし方のうまさに華やかで繊細な筆遣いが心地よい。石川汀香さんは「すみれ」、「山桜花」、「水仙」、「菜の花」、「雪やなぎ」の5つのパネルに変化のある文字でかき、形や色をかえて楽しい雰囲気をつくっていた。今回は汲古の意味で、特にかなの古典の臨書に力点をおいた出品も特徴であった。中村天香白鶴会長も賛助出品していた。(S.K)

熱気の東京画廊

振り返ってみると、青年時代からずっと私は現代美術と関わってきました。

まず大学を卒業して現代美術を扱う画廊の老舗、東京銀座の「東京画廊」に勤めました。1960年代後半のことで、若い篠原有司男や吉村益信等のネオ・ダダや、白髪一雄や元永定正等の具体グループが、東京画廊を拠点として活躍していました。台頭する現代美術の熱気が感じられる時代でした。

画廊では、徒弟のようにガラスの切り方や、風呂敷の結び方(当時、箱に入った美術作品は大方風呂敷に入れて運んでいました)、絵画・彫刻の展示方法まで、徹底して美術品の扱い方の指導を受けました。

1960年代の後半に、アンディー・ウォーホールのマリリン・モンローのシルクスクリーン10点のシリーズが日本に初めて入ってきました。鮮烈でした。

イタリアではアルテ・ボヴェラが勃興していましたが、画廊ではそれに影響を与えた空間主義のルチオ・フォンタナやエンリコ・カステラーニ展を開催していました。キャンパスが浮き上がり、デリケートなその作品の扱いには大変苦労しました。

スペインの作家ホアン・ヘノベス展を開催中のある日、ホアン・ミロが画廊を訪れました。晩年のミロは、やさしいまなざしをしたおだやかな容姿で、私がその後何年も経ってイングランドのハートフォードシャーの自宅で会ったヘンリー・ムーアと、印象がとても似ていました。

アメリカの蜚

その後留学したアメリカも大きな変動期にありました。学んだのはシカゴの美術大学。ベトナム戦争の真只中で、悩む若者たちを見ました。

シカゴには印象派と浮世絵コレクションで有名な美術館があり、私が学んだのはその付属大学でした。つまり学生は美術館内で、世界の第一級の芸術作品と接しながら学んでいたのです。ジョルジュ・スーラの大傑作「グランド・ジャット島の日曜日の午後」は当時、薄暗い部屋に1点だけ劇的に展示され、強い印象を放っていました。

私の滞在中に、シカゴ現代美術館が完成し、私は学生アルバイトとして、展覧会の設営にかかりました。

アメリカは何でもスケールが大きかったのですが、蜚の大きさにはびっくりしました。遠くで見ている分には風情がありましたが、自動車で近づいたりすると、その光をめがけて飛び込んできます。その突撃機のような蜚は、アメリカの自然と関わるランド・アート、あるいはアースワークのロバート・スミッソンやウォルター・デ・マリア、そしてマイケル・ハイザーを連想させました。後年私が接することになるイギリスの自然派アーティスト、リチャード・ロングやデイヴィッド・ナッシュ、アンディー・ゴールズワージー等のヒューマン・スケールの静かな表現とは対照的でした。

変わるイギリス

そしてイギリス。文化交流機関ブリティッシュ・カウンシルでアーツ担当官として長年働いていて興味深かったのは、イギリスが連想させる暗く伝統的で保守的なイメージを払しょくして、新しく躍動する現代のイギリスを世界に知ってもらおうとしていたことです。もちろんその新しさは、歴史や伝統と深く結び付いたものでした。

私の役職が複数形のアーツとあるように、専門分野の美術だけでなく、音楽、演劇、映画等、他分野の芸術の企画も積極的に手掛けました。2004年の退任まで、多くの現代美術の企画に関わり、大規模なものとしては奇跡的に実現した珠玉のターナー展、最重量級のヘンリー・ムーア展等。そして1982年以後、その時代の最先端を行くアーティストを集めた「今日のイギリス美術」「イギリス美術は今」「リアル・ライフ」等の現代美術展のシリーズがあります。時代は変わり、常に新しい作家や様式が現れ、仕事は無限である、と実感してきました。企画する自分に必要なのは、変化する世界に柔軟に対応して行くことだと常に思ってきました。

そして熊本

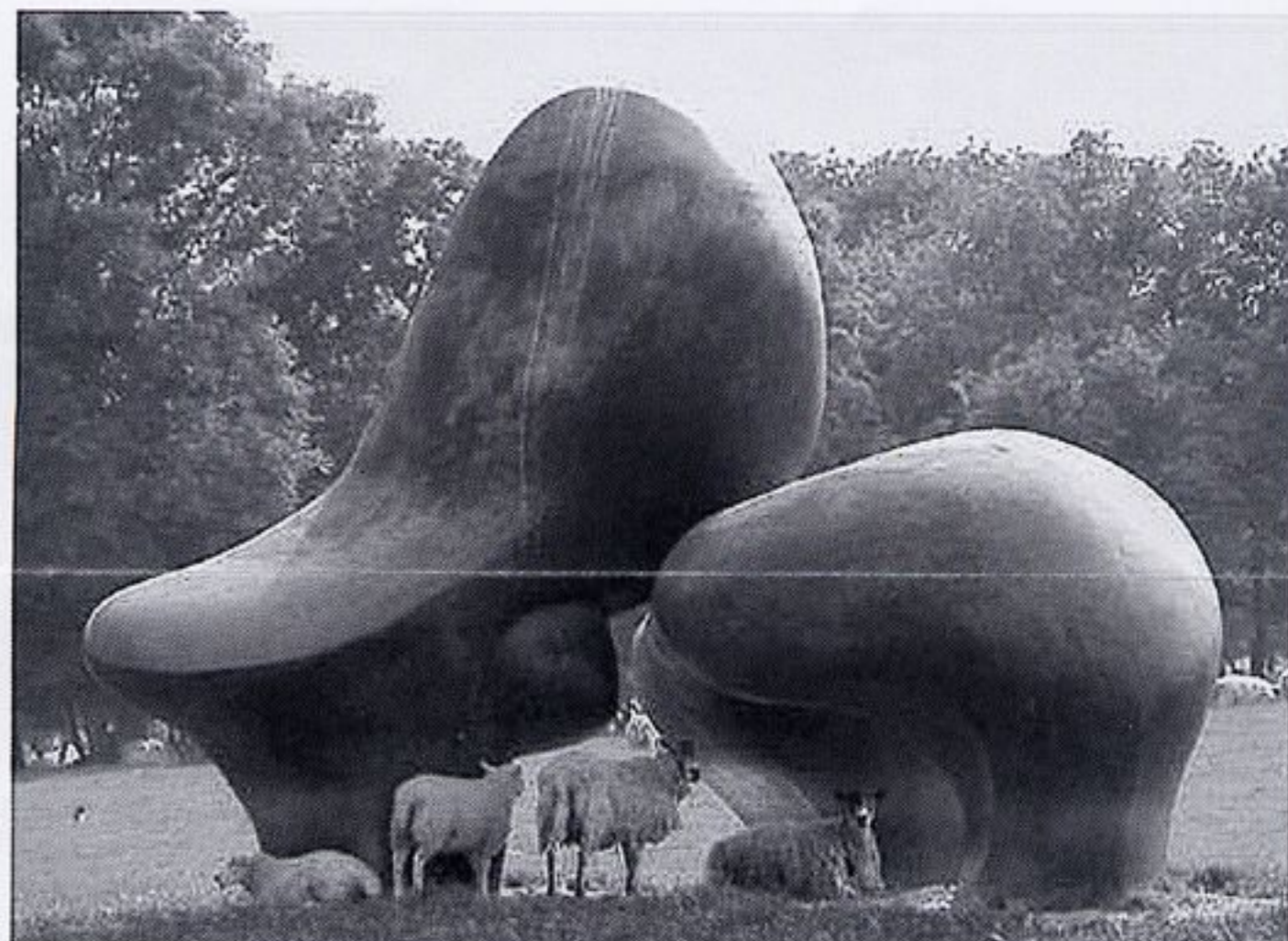
ここでの仕事は、自分のやってきたことの新たな展開、と捉えています。現在の展覧会「ピクニックあるいは回遊」が示すように、ただ美術に特化するだけでなく、多様にクロスオーバーし、さらにダイナミックな企画が実現できたら、と考えています。もちろん予算が必要ですし、多くの組織との友好的な連携が重要となります。策を練ります。



アンディー・ゴールズワージー「七つの尖塔」
グライズテールの森にて



ヘンリー・ムーア「ナイフ・エッジ」
ロンドンのキューガーデンにて



ヘンリー・ムーア「羊の作品」
ヘンリー・ムーア財団にて

Visitor's Letter

来館者のみなさんからのメッセージアンケートに寄せられた感想(抜粋)を紹介いたします。

◇日比野克彦 HIGO BY HIBINO展

・地域に密着したイベント開催やウェブの更新も早く、美術館の1つの特徴が伺われます。「美術館」というと構えてしまうこともあるのですが、各分野から熊本について悟っていくことは大変意義があるように思います。(60歳、男性、熊本市内)

・これほど充実していると思いませんでした。(24歳、男性、東京都)

・最初は、何が展示されているのかよくわからなかったけど、説明を聞いて驚いたりすることが多く、楽しめた。(17歳、女性、熊本県)

・熊本生まれですが、育ちは県外だったので、熊本の土地や人にそ外感を持っていたのですが、日比野さんの展覧会を見て、アートという方法をもって、知らない土地でのつながりを感じることができました。見てよかったです。(19歳、女性、東京都)

・とても魅力的な作品があり、大変おもしろかった。(24歳、男性、岡山県)

・展覧会の中にいらっしゃる方の説明が聞けたので、普通に見るより倍楽しめました。熊本の伝統のすばらしさ、なぜ今まで伝統として残って来たのか理由がわかり、新たな視点で今後熊本が見れる気がします。(23歳、女性、熊本市内)

・会場が明るく、テーマ性があるもので良かったと思います。(22歳、女性、京都府)

お知らせ

熊本出身の生人形師松本喜三郎の名作《谷汲観音像》(熊本県重要文化財)の修復が完了し、浄国寺本堂へ戻ってこられました。《谷汲観音像》は、2004年に開催された「生人形と松本喜三郎」展の際にもご出品いただいております、当館ととても縁の深い観音さまです。足のいたみもすっかり修復され、中山住職のお話のとおり「お風呂あがりのような足の美しさ」です。衣装もすべて織りなおされ、お像の美しさがさらに引き立っている感があります。これからはまた、いつでもあの柔らかな笑顔のお姿をみる事ができますので、ぜひご覧になったことのない方は、浄国寺へ足を運んでみてはいかがでしょうか。



編 日比野克彦「HIGO BY HIBINO」展では、最終日に石壇が完成！そして「ピクニックあるいは回遊展」では、初日から富永剛さんの巨大な土壁が出現！現代美術は、私たちの予想をはるかに上回るスケールの大きなプロジェクトや作品がたくさん存在します。それはすなわち、あらゆる人間が持っている可能性の大きさのあらわれなのかな、と最近しみじみ思います。すべてのひとのハッピーの可能性をサポートできる美術館として、活動していきたいものです。

編集長 富澤治子

●執筆者一覧 ＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)
森山淡草
Tanso Moriyama (書道家)
本田代志子
Yoshiko Honda (熊本市現代美術館主任学芸員)
藤原江美
Emi Zoza (熊本市現代美術館学芸員)
富澤治子
Hanuko Tomisawa (熊本市現代美術館学芸員)

坂本照子
Akiko Sakamoto (熊本市現代美術館学芸員)
芦田彩美
Aki Ashida (熊本市現代美術館学芸員)
竹田 茜
Akane Takeda (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
伊豆葉々
Nana Izu (熊本市現代美術館学芸アシスタント)
矢加部 咲
Saki Yakabe (熊本市現代美術館学芸アシスタント)

橋本真紀子
Makiko Hashimoto (熊本市現代美術館主事)
西田真理
Mari Nishida (熊本市現代美術館総務課職員)

●発行元/ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.37
2008年6月発行(初夏号) ◎無料◎
●発行人/桜井 武 編集長/富澤 治子 ●印刷/コロニー印刷
●デザイン/(有)松永 社デザイン事務所
●発行/熊本市現代美術館 〒860-0845 熊本市上通2-3
TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892